

作品リスト

※記載は、題名(日・英)、制作年、技法または材質(日・英)、画面寸法(縦×横cm)、当館分類番号である。
※リストの順は展示順とは必ずしも一致しない。

やなぎみわ YANAGI Miwa

1967年兵庫県神戸市に生まれる。1991年京都市立芸術大学大学院美術研究科(工芸専攻)修了。1990年代より制服を着た若い女性によるパフォーマンスやCGを用いた写真作品を発表。2000年より女性が半世紀後の自分を想像した姿を再現した「マイ・グランドマザーズ」シリーズ、2004年には少女と老婆の寓話を題材とする「フェアリー・テール」シリーズを発表。2011年より演劇のプロジェクトを開始し、国内外で上演を続ける。福岡市美術館では1996年に開催した「流動する美術IV」に参加。2009年第53回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館で個展。2019年個展「神話機械」が国内美術館4館を巡回。

1 The White Casket

The White Casket
1994
ダイレクトプリント
direct print
4点組 4pieces
各 each90.4×77.4
2-F-395

2 アクアジェンヌ・イン・パラダイスⅡ

Aquasienne in Paradise II
1995
ダイレクトプリント
direct print
3点組 3pieces
各 each200.3×100.3
2-F-396

3 Information City 泉の庭／光の森／エレベーター

Information City: Fountain Garden / Woods of Shine / Elevators
1996
ダイレクトプリント
direct print
3点組 3pieces
165.5×316.5 / 165.5×110.0 / 165.5×316.5
2-F-397

4 Eternal City I

Eternal City I
1998
ダイレクトプリント
direct print
179.5×359.4
2-F-398

リサ・ミルロイ Lisa MILROY

1959年カナダのバンクーバーに生まれる。ロンドン(英国)在住。1977年から79年までロンドンのセント・マーチンズ・スクール・オブ・アーツで学び、1979年から82年までロンドンのゴールドスミスカレッジで学ぶ。1980年代後半に日用品や家庭にあるものを無地の背景に反復的に描いた絵画で注目を集める。1989年ジョン・ムーア絵画賞第一等。1994年からライクスアカデミー客員教授。2009年よりロンドン大学スレード美術学校大学院絵画科長および教授。2006年ロイヤル・アカデミー会員選出。1990年から91年に日本の美術館6館を巡回した「イギリス美術は、いま一内なる詩学」に出品(同展は1990年に福岡市美術館でも開催)。2018年パラソルユニット(ロンドン)にて個展「Here & There」開催。

5 靴

Shoes
1989
油彩・画布
oil on canvas
203.2×284.5
3-A-172

6 壺

Vases
1990
油彩・画布
oil on canvas
221.0×304.8
3-A-173

7 黒

Black
2012
油彩・画布
oil on canvas
134.8×194.4
3-A-416 2019年作者寄贈

8 白

White
2012
油彩・画布
oil on canvas
135.7×195.0
3-A-417 2019年作者寄贈

9 格子柄のドレス

Plaid Dress
2019
アクリル顔料、ポリエステル、ファスナー
acrylic paint, polyester, fastener
105.0×50.0
3-K-1 2019年作者寄贈

10 筆跡模様のドレス

Brush Marks Dress
2019
アクリル顔料、ポリエステル、ファスナー
acrylic paint, polyester, fastener
105.0×51.5
3-K-2 2019年作者寄贈

纏うわたし、見るわたし やなぎみわとリサ・ミルロイ

Wearing and Staring: YANAGI Miwa and Lisa MILROY

会期 2020年10月27日(火)-12月27日(日)

会場 近現代美術室B



やなぎみわ《アクアジェンヌ・イン・パラダイスⅡ》1995年



リサ・ミルロイ《黒》2012年



〒810-0051
福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051(代表)
FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

京都を拠点に写真・演劇の分野を横断し活動するやなぎみわと、ロンドンを拠点に絵画を制作するリサ・ミルロイ。当館はやなぎの作品4点、ミルロイの作品6点（うち2点は研究資料）を所蔵している。所蔵作品によるやなぎとミルロイの2人展ともいえる本展では、それぞれの作品世界を味わうとともに、両者の作品に登場する衣服が女性用のものであるという共通点を手がかりに、わたしたちが日常的に行っている「纏う」行為と「見る」行為をとおして、わたしたちの生きる社会や生活につなげ、考えたい。

やなぎみわのエレベーターガールシリーズ

当館が所蔵するやなぎみわ作品はエレベーターガールシリーズの写真作品4点である。

『The White Casket』では、エレベーター庫内に赤い制服を着た女性3人が円を描くように横たわっている。彼女たちの身体は溶け、血液、痛み、そして死をも想起させる赤い液体に変容し、某百貨店の包装紙模様になる。タイトルの「Casket」は貴重品を入れる小箱あるいは棺を意味するが、彼女たちの死をも暗示しているのだろうか。しかし液体は、扉の隙間から流れ出ようとしていることに気づくと、彼女たちが死を選んだのはなく、液体に変化してもこの閉鎖空間から逃れ出ようとしているようにも見えてくる。

『アクアジエンヌ・イン・パラダイスII』は、『The White Casket』の続きのように（制服は異なる）、エレベーターの扉が開き、女性たちが座り込んでいる。開いた扉の先は、周囲を無数のエレベーターが取り囲む円形空間。行き場のない閉塞感は続いている。赤い制服に身を包み併む彼女たちの姿は、「アクアジエンヌ」（水の中に棲む女性とでも訳せようか）の名の通り、水槽の中の観賞魚のようである。

『Information City 泉の庭／光の森／エレベーター』では、女性たちはインフォメーションカウンターに集い、エレベーター庫内ではショーウィンドウのマネキンを演じてみている。『Eternal City I』においては、床に置かれた白い積み木のような都市の模型を見つめ、あるいは戯れている。

*

エレベーターガールとは、百貨店ビル等のエレベーターを操作・案内する職業の通称である。1990年代末から2000年代にかけて徐々に姿を消していくため、エレベーターでこの職の女性たちの姿を目にすることも、「上へ参ります」「ご利用階をお知らせ願います」「○階○○売り場でござります」という定型のフレーズを耳にすることもなくなった。エレベーターガールは、1929年に松坂屋上野店への最新機種エレベーターの導入時に誕生した。エレベーターの操作はそれまで男性が担っていたが、操作が容易になり、客が最初に出会う百貨店の顔として女性がふさわしいと考えられ、「昇降機ガール」として採用されたのだという¹。当時「婦人職業の新進出」と謳われたこの職は、日本においては若年女性の職業としてジェンダー化されていった²。

彼女たちも纏う「制服」とはそもそも属性や役割を表すものだが、昭和に生まれた女性の案内職の服装は、所属によって色や形に違いはあるけれども、膝上丈の制服、帽子、白手袋、ヒールパンプスを身につけるという点で特有のもので、共通している。エレベーターガールの存在を知らない現代の目にも、作品中の女性たちが、客を出迎え、案内業務をおこなう職に就いていることは察せられるだろう。

大学院修了後、教員として自宅と職場を往復する生活を送っていたやなぎは、通勤途中に目に入る都市空間のなかで、制服に身を包み、儀式的な動作を繰り返し「社会に対して演

技をし続ける」女性たちに惹かれ、自らの姿をも重ねていたという。「エレベーターガールやコンパニオンガール、デパートガールなどは日本独特の職業」であり、「そこから日本における女性像の一断面が見えてくる」³と考えたやなぎは、1993年の初個展でギャラリー空間の奥にエレベーターの扉を仮設し、制服を着た2人の生身の若い女性がエレベーターガールを演じる、パフォーマンスの要素を含んだ作品を発表した。

しかしながら生身の人間によるパフォーマンスでは、実現できない世界があった。やなぎは、現実の都市空間をコンピューター合成し、SF映画に出てくるような、どこまで行っても出口のないような空間、「常に激しく流動している商業空間にはあるまじきフリーズのしかたをしている、機能停止の状態」⁴を作り上げ、その中に制服を着た女性たちを棲ませた。インタビューで「エレベーターガールは取り残された人」のかと問われたやなぎは、消費社会を象徴する「花と等価」な「商品そのもの」⁵であると答えている。

人の気配がなく、塵ひとつないSF的な都市空間は、都市空間の美しい部分だけを抽出し、閉じ込めた資本主義の行き着く先か。それは1990年代時点の日本社会が夢見た世界でもあったともいえるが、そのなかのエレベーターガールたちは、閉塞感や消費空間に取り込まれてしまうことから逃れられない諦念のようなものを抱えながら動き出す。倒れ込むように床に座り込み、持ち場を離れ、集い、空間を占拠し、群れをなすその様子は、お互いを労わりあっているようにも、小さな声で囁きあって何かを準備しているようにも見えてくる。

*

当館が所蔵するのはエレベーターガールシリーズの作品のみだが、やなぎは以降も女性の生をテーマに作品を発表し続けている。同世代の女性たちが想像した50年後の理想の姿を当人に演じてもらうマイ・グランドマザーズシリーズ、世界各地の寓話に登場する少女と老女の物語を少女たちが演じるフェアリーテールシリーズ、風に吹かれても大地を踏みしめ踏ん張る巨大な少女から老女までのポートレート『ウィンドスウェープ・ウィメン』等々。エレベーターガールシリーズ以後のやなぎ作品に登場する女性たちは、彼女たちを抑圧する社会通念や制度の中に身を浸すことなく、過去や未来と交信しながら、想像力の力で女性の役割を更新していく。

ちなみに2011年からスタートした演劇プロジェクトにおいては、エレベーターガールを彷彿とさせる制服を纏った「案内嬢」が再び登場する。ここでの「案内嬢」は、エレベーターガールシリーズにおける現代の女性とは異なり、1920-30年代のモダンガールであり、「様々な話芸を操るイタコ」であり、「女性の近代的姿の象徴」⁶であるという。やなぎはエレベーターガールが誕生した時代まで遡り、近代日本における女性と社会の関係を見つめなおし、「案内嬢」／エレベーターガールに、新たな命を吹き込もうとしているようにも思われる。

リサ・ミルロイの作品における衣服

当館が所蔵するリサ・ミルロイ作品は6点。1990-91年に日本の6つの美術館を巡回した展覧会「イギリス美術は、いま一内なる詩学」の開催を契機に収蔵した絵画、2019年度に作家から寄贈された絵画と、手彩色の生地を使用したドレスで構成される。

リサ・ミルロイは、静物を描く画家として知られる。その絵画は、目の前のものを画布に克明に写すではなく、記憶の中のものを記憶が途切れないうちに素早くキャンバスに描き留めるような、素早い筆致が特徴といえる。モチーフは、本、

レコード、扇子、リボンやレース、電球、イヤホン、レコード、金具、切手、金貨など多岐にわたるが、それらはミルロイが生活のなかで見出した身近な愛着あるものだと考えられてきた。モチーフは《靴》や《壺》のように分類され、白い地の上に規則的あるいはランダムに配置され、描かれる。

「私が絵を通して伝えたいのは、描く対象が単なる“もの”ではなく、他の思想への扉が開かれているということです。／たとえば靴ですが、じっと見ていると、これだけ並んだ靴一つ一つが個性を持っていることがわかるでしょう。これは『群衆の中の個』を象徴しているんです。」「私は人や風景を描きませんが、この壺の表面にはさまざまな人や風景が描かれている。それを描き写すことで、私のオブジェクトは『世界』とのかかわりをもつのです。壺の中に世界が内包されている、と私は考えています。」⁷

ミルロイの絵画は、見る者に描かれたものの外部への想像を喚起させる。それは、人間や社会のありようや、世界とのかかわりを表わそうとする問題意識にも拠っているといえるだろう。そのなかでわたしたちの生活と切り離すことのできない、あまりにも身近なものである衣服を、ミルロイがモチーフとして度々描いてきたのは必然であるようにも思われるが、本展開催にあたり、改めてミルロイに衣服というモチーフについて訊いてみた。（次の章は、ミルロイに作品における衣服について尋ね、得られた回答を元に構成している。）

*

ミルロイは美術学校に在籍していた1982年ごろから、衣服をモチーフに絵を描いてきた。最初に描いたのは黒い靴で、以降、スカート、ドレス（ワンピース）、シャツ、ネクタイ、靴下、毛皮のコートや帽子、1990年代には着物も描いている。

スカートやドレスを描くことに惹かれた理由には、生地の柄や色のバリエーションが豊かで、なにより描く楽しみがあったという（ミルロイはその後、生地の柄のみをキャンバスに描くシリーズにも着手している）。ミルロイが描くモチーフ「もの」は必ずしも自身の愛用品とは限らないが、スカートについては当時よく履いていた1950年代スタイルの、ギャザーが入りたっぷりとしたシルエットの膝下丈スカートを参考に描いていたという。スカートの形状は、彼女独特的の素早く筆を掠くような描法とも呼応し、白い地にリズムや動きを与え、配置を熟考する機会にもなった。

ミルロイは、衣服を描くことで、批評的な観点からアイデンティティと表象の問題や「同じであることと違うこと」について検討する道が開かれたと語る。ミルロイがここで述べるアイデンティティとは、社会の1個人、アーティスト、集団もしくは家族との関係における個人といった自身のさまざまな側面を含んでいる。ミルロイにとってドレスやスカートは母親、女性であること、「女性らしさ」を物語るモチーフであり、白いシャツは父親や「男性らしさ」と結びつくものだった。「女性的なもの」も「男性的なもの」も自分のアイデンティティには不可欠であり、だからこそ絵画を通してそれをイメージし、描くのだとミルロイは語る。それは自身の経験やリサーチ、そして感覚から形作られたものだ。1985年に描いた《ドレス》は、さまざまなタイプのドレスを並べ描いたものだが、この時ミルロイは性格の異なる女性たちが連帯し、集っているところをイメージしていたという。一人一人が主人公でありうる女性たちの集団という主題は、1990年代の「日本の版画」シリーズや、2000年代の「芸者」シリーズ等でも展開した。近年は「マネキン」シリーズにおいて、衣服とジェンダー（社会的的に構築された性差）の問題が取り上げられている。

もちろんジェンダーについて語るためだけに衣服がモチーフに選ばれているわけではない。例えば2000年代以降の作

品に登場するドレスはすべて1980年代からミルロイが愛用してきたagnes b（アニエスベー）のノースリーブワンピースの形をモデルにしているが、「もの」への愛着だけでなく、その長方形に近いドレスの形状そのものも重要であった。ドレスは、キャンバスの「ポートレート」の形式あるいは鏡としても機能し、身体と感情、存在と不在について語りかけるのだ。

* * *

2010年代より、ミルロイは「相互作用的絵画」と呼ぶ作品《Off the Rails》を各地で発表している。この作品は壁に掛けた4着のドレスと、たくさんのノースリーブのドレスが掛かるラックで構成されたインスタレーションとも呼べるもので、鑑賞者はラックの数十枚のドレスから好きなものを選び、壁の4着と掛け替えることができる。ドレスは画家本人が布をラフに縫い合わせ手彩色し作ったものだ。ミルロイの関心が、色や柄を選択し構成するという創造行為と、わたしたちが日々繰り返している服をコーディネートするという日常行為の交差にある事がわかるだろう。本展で展示する2着のドレスは、衣装デザイナーのLorraine Richardsとのコラボレーションによって2019年に発表されたものだ。現在も柄・色違いのものがTateのミュージアムショップで購入できるこのドレスは、女性の生活／人生における衣服を纏うことと美術の経験を結びつける、ミルロイのこれまでの活動の展開としても、興味深いものといえるだろう。

（学芸員 正路佐知子）

【註】（数字は本文中の*に対応。サイト最終閲覧日は2020年10月15日）

*1 松坂屋ウェブサイト「ひと・こと・もの」語り <https://www.matsuzakaya.co.jp/corporate/history/honshi/syowa.shtml>

*2 桶谷美紀「百貨店業とビルメンテナンス業における女性職域—受付案内職とエレベーター運転職の事例研究」『大学院紀要』法政大学、2008年、77-102頁

*3 山下里加『Ai Artist Interview vol.03やなぎみわ』2002年

*4『Art Magazine htwi [ヒッティ]』第13号 特集やなぎみわ、特定非営利活動法人ヒール・ザ・ワールド・インスティテュート発行、2002年

*5 山下、2002年

*6 「インタビュー やなぎみわ『1924—転換期の芸術』」インタビュアー：大館奈津子、ARTiT Editor's Table、第13号2011年9月21日 https://www.art-it.asia/u/admin_ed_feature/fbe5ju4wlgacncohysz

*7『Virgin View ものを描くことで『世界』と関わってゆく Lisa Milroy』『CREA』文藝春秋、1990年9月号、168-169頁

【そのほか主な参考文献】

- ・リサ・ミルロイ ウェブサイト <http://www.lisamilroy.net/>
- ・リサ・ミルロイ「The Dress」（正路の質問に対する私信）2020年10月13日
- ・Here & There: Lisa Milroy (Exh. Cat), Parasol unit foundation for contemporary art, 2018
- ・阿南順子「ネオリベラル社会における女性の共同体—やなぎみわのビジュアル・アーツ作品を例に—」『比較日本学教育センター年報』13号、お茶の水女子大学、2017年、87-92頁
- ・山口洋三「自分の中にある、自分の見たい風景」（常設展示リフレット「やなぎみわ展」）、福岡市美術館、2002年
- ・クリスティーナ・スカール著、永田絵里訳「演じられるアイデンティティ／演じられる性差 やなぎみわの『エレベーターガール』『My Grandmothers』シリーズへの一解釈」『CROSS SECTIONS』Vol.1、京都国立近代美術館、2008年、46-52頁
- ・Lisa Milroy (Exh. Cat), Tate, 2001
- ・『イギリス美術は、いま：内なる詩学』（展覧会図録）、朝日新聞社、1990年